

編集：山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp

オヤジ剣士の特別授業

剣道教室@バージニア日本語補習校



昨年三段を取得した後、当面の目標は5月4日(土)クリーブランド剣道トーナメントに出場することだった。ここの個人戦は二段・三段の部が一緒にやるので、三段を取った私は技術的にも精神的にも相当に有利に戦うことができる。ところが、大会を3週間後に控えたある日、オークトンのマホーニー先生が、5月4日にマクレインの日本語補習校で行なわれる「目で見る剣道教室」なる特別授業の実施の打診を受け、一緒にデモンストレーションをしてくれるボランティアを探していることを知った。対象者が小学校1~6年の160人の日本人児童だけに、日本語で説明できる講師は必須だ。オークトン・クラブで受けた話であるため、マホーニー先生は最初に鈴木さんに声をかけた。しかし、世銀職員である鈴木さんはその時期インドネシア出張中だ。オークトンの有段者は4人しかおらず、鈴木さんの他にヤン先生はGW中に京都で開催される武道大会に参加するため不在、となれば残るは私しかいない。

最初は特別授業の日をどこかにずらせないと希望したが、聞くところによると補習校側では5月4日でかなり前からセットされていて、日程変更の融通が効かないらしい。(因みにメリーランド州の補習校では、同じ日に柔道のデモをやった。) 結局のところ、1年間の任期延長がほぼ確実に来年もクリーブランドの二段・三段の部に出場の機会がある私は、ここは来年あるかどうかもわからない補習校の剣道教室を優先した方が良くろうと考え、講師の話を受けることにした。

他にはオークトンの主要メンバーの殆どが参加し、剣道を実演することになった。オークトンのメンバーは、クリーブランドの試合に出るには未だ経験不足なのだ。先ずマホーニー先生が45分間の授業の基本フォーマットを作り、それを私が自分なりに脚色してよいことになった。授業前日の金曜日の練習で、最終的な授業プランを確認することにしていたが、私が職場からの帰路でトラブルに遭い、薄着の状態ですら4時間もの間自宅に入れず事態に陥ったため、当日はぶっつけ本番でやるしかなかった。

会場で実演してくれるメンバー全員に授業プランをブリーフィングする時間ぐらいはあるだろうと思っていたら、会場へは授業の5分前くらいから徐々に児童が集まり始め、先生から「もう始めて下さい」と言われ、なし崩し的に授業が始まってしまった。自分達がどう動いていいのかわかされていない上に、私が日本語で始めた説明もわからないため、大方の実演メンバーは戸惑っていた。講師である当の本人も、思いがけない事態に少々焦った。「生徒にも竹刀を持たせてやって欲しい」と先生から事前に注文されていたのに、生徒達には体育館に紙と鉛筆を持たせて連れて来るし（これを体育館の隅に運んで行かせるのにロスタイム!）、「この白線を先頭にして横一列に並んで」と言っているのに先生方がその一本後ろ側の白線を先頭にして並べ始めるし、とにかく先生方との息も合わない。

当の児童達といえば、事前にすり足（剣道の基本フットワーク）を何度か練習させ、オークトンの子供達に打ち方を実演してもらい、その上に正面打ちはこうやるんだと予め補足説明しておいても、実際に竹刀を持たせて本太刀の大人に向かって打ち込ませると、竹刀を構えた時に右足でなく左足が前に出ていたり、竹刀の柄の先端を左手でなく右手で握ったり、打った後真っ直ぐ本太刀の後ろに前進して行かずにその場に立ち止まったり、大きな声で「メン!」と言おうと呼びかけても声を出せなかったり、拳銃の果ては、正面打ちと言っているのに胸を狙ったり、面を付けている部分ではなく腕から肩の辺りにかけてたたいて来たり、とにかく思ったようには児童は動いてくれない。何も知らない大勢の児童相手にいきなり実技をやらせると、考えているより倍以上の時間がかかることを痛感した。でも、この実技は、最初は恥ずかしがって「やりたい」と手を挙げなかった児童も、最終的には殆ど全員が2本正面打ちを体験できたので、少しぐらいは「今日の授業は楽しかった」と思ってもらえたのではないかな。

授業が終わってから、参観で来られていたお母様から、「いつでも練習に加わる事ができるのでしょうか」と聞かれた。この日初めて剣道を見た児童の中から、何人かの子が「始めてみようかな」と考えてくれるようになったとしたら、今回はクリーブランドで試合に出るよりも実りのある活動に参加できたと思えるかもしれない。自分にとっても、通算で11年以上お付き合いのある剣道を別の角度から見ることができ、また自分自身のこれまでの歩みを振り返ることもできて、良い機会を与えてもらったと思う。子供達と対峙しながら、昔、父が子供会活動で小学生以下の子供達を相手にゲームの説明をしていた姿をふと思い出した。子供達にどう接するかを既に把握し、手馴れた説明振りだったあの頃の親父の領域には、まだまだ私は追いつくどころじゃないなと苦笑した。

みきお、タッカホー幼稚園入学手続完了

「サンチャイ通信」2月号にてご紹介した通り、樹生をアーリントン郡認可幼稚園に9月から通園させるための手続は、既に1月末にスタートしていた。ツベルクリン検査を受けて陰性を証明し、医者の健康診断書をもらったのが2月末。そしていよいよアポを取って郡認可パブリック・スクールのインターク・センター（英語が第二言語である外国人子女のための手続支援センター）に書類を持ち込もうと電話をかけたところ、3月中は予約で埋まっており、最短4月1日と言われた。月曜日だったので学校のある美澄に頼むわけにもいかず、結局半休を取って私が樹生を連れてインターク・センターに行くことにした。

樹生が私と一緒に行かなければならなかったのは、本人の語学力を確認するためだ。手続だけならすぐに終わるようだが、テストは検査官によるもので、どうもこちらの方が予約満杯だったらしい。検査官のおばさんに見知らぬ部屋に1人で連れて行かれた樹生は、当然ながら普段の元気はどこへやらで、

なんだか緊張して口数も少なかった。テストの内容は知らないが、結果は、人が言っていることはちゃんと聞き取れているが、自分が言いたいことを相手に伝えるための語学力は不十分で、幼稚園の後にESL（第二言語としての英語）の特別クラスを多分受講することになるだろうということだった。

さて、書類の手続の方だが、私が樹生のパスポートのオリジナルを持って行かなかったことと、出生証明書がないことが原因で、もう一度インテーク・センターに行かされるはめになった。パスポートの方はともかく、出生証明については、日本で英文のものをできるなら入手しておくべきだったと思う。こちらにはオリジナルの出生証明がなくパスポートで代用する場合、公平な第三者にそれを証明してもらう制度があるようで、「Affidavit（誓約書）」という書式に身近なところにいる「Notary Public（公証人）」にハンコと署名をもらって、それを役所に提出すればよいらしい。仕事がひと段落してから、この「公証人」というのがどこにいるか探したのだが、最も手短なのは自分が口座開設している金融機関で、その他には世銀の中にも5人ほどいることがわかった。

「誓約書」の準備もでき、もう一度インテーク・センターに行って、これで手続終了かと期待した。ところが、受付のおばさんは、書類を一通り揃えてくれた挙句、「それではこれを持ってタッカホー小学校に行って下さい。」と次なるご指示！結局、樹生が通うことになるタッカホー小学校付属幼稚園に書類を持ち込んだのは、手続締切3日前の4月12日だった。余裕を持って始めたつもりが、結構余裕無かったわけだ。これがアメリカ人だったら最初からタッカホーに持って行けばよかったわけで、受付期間開始から1~2週間で全て済んでいた筈だった。外国人でいるのもなかなか大変だ。あとは樹生君、ちゃんと頑張っ



⇒2000年12月にアメリカに来る時におじいちゃんから買ってもらった「機関車トーマス」のひらがな練習マットはただ今フル稼働中。樹生君は正解率9割を超えるところまでひらがなを覚えました。英語のアルファベットは幼稚園で特訓中。この調子で、本をすらすら読めるようになってほしい！

新マネージャー、イアン登場

復活・私の仕事シリーズ(その1)

昨年の今頃からずっと続いてきた世銀の信託基金改革がようやく先進各国政府から承認され、この2月から私の所属部署が従来の部署から分離独立し、別の管理職をいただくことになった。経緯を話すと長くなるのでここでは触れない。ただ、去年1年間は信託基金改革の議論ばかりで、JICAでそんな基金を扱う必要もなかった私は、何が何だか全然わからずに過ごしてしまった感じだ。我が派遣元は信託基金拠出を通じて世銀と関係がある援助機関ではないので、正直なところ、所属部署にいてJICAとの関係強化策に時間を費やすのは気が引けた。ましてやJICAはDCに事務所を持っているので、「世銀内にいるお前とJICA事務所の役割分担はどうなっているのか」と聞かれて言葉に窮することもあった。

これまでのうちのユニットのチーム・リーダーC女史（アルゼンチン人）は私が抱えているそうしたジレンマに対して全く無関心だった。率直に言って、これまで一緒に仕事した中で最悪のリーダーだと思う。成果品のイメージを明確にせず指示だけ出しておいて後のフォローをせず、「これでいいか」と途中経過の作品をメールで送っても返事すらくれない。当初出した指示の内容を自分で忘れて、自分が指示した（と思いこんでいる）通りに私が仕事を遂行していないことを会議で他のメンバーがいる前で指摘する。まるで私がちゃんとやっていないとでも言いたげだ。我がチームの果たすべき役割を明確

にするでもなく、思い付きで指示を出すケースが多いこと多いこと。それに振り回されるメンバーはたまったものではない。上司だから逆らうわけにもいかないが、猛烈に仕事やりづらかった。「質問があったらちゃんと聞いて！」と眉間にしわを寄せて口では言うけれど、その割には彼女のオフィスは気軽に足を踏み入れられる雰囲気にはない。「私は忙しいんだから余計なことで煩わせないで」、人が入って来てもパソコンを睨んで仕事を続けている背中がそう語っている。組織改編で新ユニットに別途管理職が加わるようになった際、C女史は自分が昇進できると考えていたらしい。それが別の職員がマネージャーのポストに就くとわかり、ユニットの多くの職員が、C女史はこのユニットには長くはいないだろうと予想している。組織の発展よりも自分の昇進なのだ。C女史と我が局の大ボス K 副総裁の間には、信託基金改革をリードしてきた A 部長（パキスタン人）がいる。彼は私の受け入れに関わった人物ではあるが、信託基金の方が忙しくなってきたため、信託基金に無関係の JICA 出身だった私のことには殆ど無関心だった。

その C 女史のさらに上司として、2月からカナダ人のイアン・ライト課長がやって来た。イアンはカナダの海外援助庁（CIDA）出身で、JICA にも理解がある。彼が就任して最初の会議で、彼は最初の 30 分演説をぶち、このユニットの役割は何なのか、そのために 1 人 1 人が何をすべきなのか、はっきりビジョンを示した。最初に目標を明確にしてくれるのは非常に仕事がしやすい。「信託基金への拠出」という色眼鏡で援助機関の選別をしないということは、JICA 出身者にとっては非常に居心地がいい。「各援助機関とのパートナーシップをいかに強化してゆくか、そのために我がユニットが何をすべきか、常に考えろ」という指示は、K 副総裁からの「世銀と JICA の連携案件の形成にもっと関与してよい」という指示とあいまって、自分を本当に動きやすくしている。彼のオフィスは机をドアの方向に向けているので、「いつでも誰でも来て下さい」という感じでとても入りやすい。唯一の問題は、彼がまだうちの課の課長としての仕事の濃淡にバランスをつけていないので、どうでもよいことにも力を注いでいてオフィスの自分の席にいることが少なく、相談したいことがある時にきちんと相談できないことが多いといったことだ。

Mikio & Chichi の大冒険！世界銀行ビルディング

4月25日は Take Your Daughters to Work(「娘を職場に連れて行こう」)

アメリカには、なんでこんなものがあるのと首をかしげるイベントが時々あるが、その最たるものは、毎月4月下旬に開催される「Take Your Daughters to Work (娘を職場に連れて行こう)」というやつだ。去年こんなイベントがあり、しかもウォルフエンソン総裁自らが子供達と会って記念撮影されると知った時、「世銀も物好きだな」との感想を持ったが、今年はアメリカのカレンダーに堂々と記載されているのを知り、これがなにも世銀だけの物好きイベントではないことがわかった。パパ（やママ）がどんなお仕事をしているのか知ってもらおうという趣旨なのだろう。なんで「娘」だけなのかはよくわからない。日本ではよく耳にする父親と娘の断絶というのは、アメリカでもやっぱり問題視されているのだろうか。

いずれにせよ、去年は対象が「娘」だけであったこと、しかもイベントの対象者が6歳～15歳ということで、千智にはちょっと早いと思って参加することは最初から考えていなかった。しかし、今年を対象を「息子」にも拡大、オフィスが私の隣りで毎日世間話が絶えないエカテリーナ女史がボランティアをやるということもあり、彼女から無理矢理誘われて樹生も千智も参加させることにした。エカテリーナは去年の2月に一度だけ千智に会ったことがあり、以後千智のことを「マイ・フレンド」と形容する。彼女の16歳になる次男を千智の花婿候補に入れておけと真顔で言うし、私がオフィスのパソコンのデスクトップに一時設定していた千智の写真を自分にもファイル転送してくれとせがんだ。エカテリーナのお目当ては当然千智である。

8時30分までに協調融資局会議室に集まった子供は約25人、やや遅刻して滑り込んだ我が家の子供達は、いつもと違う顔ぶれにびびり、子供達の輪の中に入って行けない。樹生は「ボク幼稚園に行きた

いんだよお」と小声でつぶやき、千智はパパのズボンにしがみついて離れようとしめない。結局引率ボランティアのマルヴァやエカテリーナに断った上で我が家の子供達は別行動にしてもらい、私のオフィスで遊ばせることにした。机の上の書類を片隅に積み上げ、子供達のお絵かきスペースを確保し、時におやつでご機嫌を取り、時にパソコンで「ウルトラマン・コスモス」のウェブサイトを開覧させて興味を惹き、「ポスト・イット（付箋）」に落書きをさせて私の部屋の壁に貼って並べさせるといった具合でなんとか時間をつぶしていったが、しまい狭い部屋で飽きてきた樹生君は廊下を徘徊し始め、千智に至ってはなんと二度もオムツでウ○チをしでかしてくれた。さすがに世銀ビル内にオムツを交換できる設備はなく、仕方なくオフィス内の絨毯の上に千智を寝かせてオムツ交換をやった。



こんな具合で、この日は全く仕事にならなかった。しかし、引率ボランティアが子供を連れて世銀ビル内観光ツアーに行ってくれることを想定して、私は11時のスタッフ会議には出ることにしていたため、他のスタッフのご厚意もあって、なんと会議室に子供達を連れ込んで会議に同席させた。自室では全く仕事にならなかったのも、子供達はパパのお仕事って何なのかまったくわからなかったと思う。こうして会議に出てしっかり発言しているパパの勇姿を見てくれれば少しは感銘受けられないかな…なんて期待は甘い甘い！会議の最中に千智は眠くなってぐずり始め、終いには寝てしまう。樹生は狭い会議室にすぐに飽きて、何度も何度も「パパ、ボクはパパのお部屋に戻りたいよ」と耳打ちしてきた。「もう少しで終わるから」と何度も言い聞かせた会議は結局1時間30分もかかった。その間、樹生をトイレに行かせ、すぐに目を覚ました千智もトイレに行かせた。それでも千智は先述の通りその後でオムツの中にウ○チをしてくれたのだ。

でも、悪い話ばかりだったわけでもない。樹生君も千智ちゃんも、会議室に子供達が集まって食べた昼食タイムには、しっかりビッグサイズのピザを2ピースたいらげたのだ。樹生君に至っては、しっかり会議室のテーブルに座った他の子供達に混じって一緒にピザを食べていた。要は初物への警戒感強いけれど、すぐに馴染める良い子なのだ。私の部屋の前の廊下でも、我が局のOAスタッフのサムやヒューバートに遊んでもらって、結構楽しんでた。千智も、会う人会う人に「カワイイ！」と感動され、興味を惹いていた。後日談になるが、こうして子供を連れてきたことで、普段あまり話す機会がなかった世銀職員とも打ち解けて話すことができるようになった。私にとってもメリットはあったと思う。

さて、この日の公式イベントは午後4時で終了。私は世銀アフリカ局職員を連れてJICAワシントン事務所での会議があったので、午後3時には世銀ビルを後にした。JICA事務所には会ったことがある

お姉様方が一杯いらっしゃり、会議をやっていた1時間30分の間、子供達は事務所のスタッフにお相手してもらって別室で遊んでいた。会議が終わり、駐車場に行って子供達を車に乗せると、2人ともすぐにコテツと寝てしまった。いつもの幼稚園よりも歩いた距離が長く、見知らぬ場所でもあったので、きっと疲れたのだろう。千智に至っては翌朝まで結局起きなかった。でも疲れたのはパパも一緒だ。まる一日子供の相手をするのがどれだけ疲れるか、それも周囲に気を遣いながら子供の面倒を見るのは大変な気苦労がある。私もこの夜はいつもよりも眠りが深かった。

翌日、データ保管班のダニエルから、「うちの子供も今は3歳なんだけど、来年は連れて来るよ」と言われた。あと1年もすれば我が家のチビッコギャング達ももう少し分別がつくようになっていだろうが、来年のことは暫く考えたくないというのが今の率直な感想だ。

今月ももう少し言わせて！

- **同性愛者の生態**：先月の「ワシントン桜まつり」の別ネタになるが、「剣の舞」を見に行く前に、DCのアダムス・モーガン地区に家族で昼食に出かけた。お目当ての日本料理店「寿司太郎」が閉まっていたため、仕方なくその通り沿いにあったオープンテラスのラテン系レストランに入ったのだが、周囲に若い男性ばかりのペアが何組もいて、「ここってひょっとしてゲイ・カップルの溜まり場では？」と美澄とヒソヒソ話し合った。店内には「Washington Blade」という同性愛者専門の週刊誌が大量に置かれている。相席になったカップルは、我が家の子供達にはそれなりに敬意を払い、話しかけてくれたし、喫煙も遠慮してくれた。後で聞いた話だが、「寿司太郎」以北のその通りは、ゲイ・カップルが闊歩する街なのだそうだ。さて、その1週間後、私が所用でもう一度ジェファーソン記念堂を訪れ、タイダル・ベイシンの満開の桜をぼーっと眺めていると、階段の踊り場でたむろする若者グループがいた。携帯電話で友達を呼び出しているのは普通の姿だったが、呼び出されて来た若者は皆男性で、中には会ったとたんに抱き合っていたカップルもいた。同性愛者というのは1対1のカップルなのかと思っていたが、グループで行動していて、外見は普通の若者と変わらないが、男同士でベタベタしている姿を見ると、異様な違和感を抱かざるを得ない。
- **JICA・世界銀行定期協議 2002 を終えて**：4月初旬、JICAと世銀の定期協議が開催された。去年、私の方からJICA側が望みもしないアジェンダをいくつか加えて、結果JICAミッション側から否定的発言ばかりを浴びせられ、応対してくれた世銀職員に不快な思いをさせたという反省もあって、今回は全くノーガードでJICA側の要望だけを受け入れて日程を組んでみた。JICA側の団長は外務省から天下りしてきた理事で、団員の中にも1名、外務省職員が加わっていた。課長のイアンも出席したオープニングセッションでの団員紹介で、この理事が同行してきた外務省職員を紹介する際に「彼がボスだ」と言ったお陰で、後でイアンから、「相変わらずJICAは外務省のマイクロ・コントロール下にあるなあ」と小言を喰らった。彼はOECD（経済協力開発機構）にいた頃に日本の援助政策の評価調査に携わったことがあり、政策立案に割ける時間と労力が不足している割には実施面の些細な事項にまで口を出してくる外務省と干渉される側のJICAの関係をよく知っている。「JICAは5年後に独立行政法人になっても外務省のコントロールを受けると受け取られたに違いない。同行の外務省職員が終始無言で、見方によってはJICA側の発言を監視しているようにも確かに見えた。しかもこの方は他のJICA側出席者の誰よりも若かったし…（去年は私も外務省所属の団員を協議の席に加えるのは「JICAの自主性が損なわれる」という理由で強硬に反対したのだが、別件もあって本部の某課長にお叱りを受けたので今回はおとなしく要望を受けた。結果はまるっき裏目だ。）外務省がJICAをコントロールしているのなら、最初からJICAとではなく外務省と協議をすべきだ」という話にもなりかねない。

編集後記

- 今年も4月初旬の週末から夏時間 (Daylight Saving Time) が始まり、夜明けが早く、日没が遅くなりました。気温も上がってきたので、久々に早朝ジョギングをやろうと考えていた矢先、ジョージ・メイソン大学 (GMU) での剣道の練習中、左足ふくらはぎの肉離れを経験しました。仕事が忙しくて普段頻繁にやっていた自宅での素振りも全くせずにいきなり週末に剣道の練習をやったらこのざまです。勿論、GMUの練習がオークトンよりも荒っぽくて、面を付けた状態で180本の跳躍正面打ち (速素振り) をやってまともにいられる方がおかしいのですが。しかも、少し良くなったと思ったらまた週末に剣道をやって痛めるという悪循環で、2週間以上痛みがひきません。本当に「オヤジ」になった感じです。さて、本編でご紹介した剣道特別授業のその後の反響ですが、お世辞半分かもしれませんが、児童にフットワークや面打ちを体験させた授業プランが先生や父兄の間で受けて、今までの特別授業の中でいちばんよかったという褒めの言葉を先生とPTAの代表の方から頂戴しました。先生方がいちばん危惧されていたのは、特別授業で啓発された児童が休憩時間中に箒でチャンバラを始めることだったらしいのですが、それは杞憂に終わったとのこと。え？これって、子供達が結局剣道に興味を持たなかったからではないかって？小学校時代、掃除の時間に箒でチャンバラをやっていた私としては複雑な心境です。
- 美澄ママは、中間試験を見事クリアしました。クリアしたらマッサージ・テーブルを買う約束をしていましたので、ママはさっそく注文しました。最近お疲れ気味のパパはこれでマッサージの恩恵をあずかされると期待しています。残り3ヶ月、視界が開けてきた感じです。
- こちらでのインターネット環境は、東京で使っていたソネットをISPとして活用し、最寄りのロミング・サービスに繋げて使っていましたが、今後通信教育でメールやインターネットをフル活用する必要性に迫られ、とうとうベライゾンのオンラインDSLに加入しました。そもそもネットの知識がゼロに近い私にとっては悪戦苦闘の連続で、昨日はEthernetのPCカード、今日はプラグのアダプターと、必要が生じる度に買いに走り、ベライゾンから送付されたソフトを、英語の説明書を読みながらインストールしてDSL環境を構築するのにさらに2晩かかりました。電話サービスのお世話にもなりました。お陰で、重いファイルを添付してもメールの送信にかかる時間は苦にならなくなったし、ホームページの閲覧の際、特に写真データを閲覧する際のダウンロードの速度が格段に早くなったように感じました。